

国際学会報告



第 19 回国際エチオピア学会学術大会報告

有井晴香

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

第 19 回国際エチオピア学会学術大会が、2015 年 8 月 24 日から 28 日にかけてポーランドの首都ワルシャワで開催された。第 16 回ノルウェー大会以来のヨーロッパでの開催となり、24 ヶ国から 300 人以上が参加した。個人発表をおこなった日本からの参加者は、石原美奈子（南山大学）、乾秀行（山口大学）、大場千景（大阪府立大学）、金子守恵（京都大学）、重田眞義（京都大学）、清水信宏（慶応義塾大学）、田川玄（広島市立大学）、Tadessa Daba（京都大学）、西崎伸子（福島大学）、藤本武（富山大学）、眞城百華（上智大学）、吉田早悠里（名古屋大学）、および筆者の計 13 名（五十音順・敬称略）であった。運営委員会の発表によると、日本人の参加者は、エチオピア（70 人）、ドイツ（54 人）、ポーランド（19 人）、アメリカ（14 人）、イギリス（13 人）に次ぐ人数であったという。

大会初日は 8 時 30 分からワルシャワ大学・旧図書館棟（Old Library Building）のメインホールで参加受付がおこなわれた。12 時からオープニングセッションが開かれ、13 時 30 分からはオープニングレクチャーとしてワルシャワ大学の Adam Lukaszewicz 氏がポーランドにおけるエチオピア研究の歴史について講演をおこなった。ポーランドにおいてエチオピア研究がはじまったのは 1950 年代のことであり、1968 年に学会の開催が予定されたものの、実現せず、今回の開催は長年の念願がかなったと語られた。

大会 2 日目から個人発表が始まり、9 時から 10 時 30 分、11 時から 12 時 30 分、13 時 30 分から 15 時、15 時 30 分から 17 時の間におこなわれた。各セッションの間には休憩と昼食の時間が十分にもうけられていた。個人発表は旧図書館棟（9 部屋）と隣接する東洋研究学部棟（3 部屋）に加え、ワルシャワ大学から徒歩 10 分ほどの距離にある国立博物館において 4 日間おこなわれた。国立博物館においては、大会 2 日目に *Beti and Amare* と *Crumbs* の 2 本のエチオピア映画が上映された。

大会 2 日目と 4 日目の 13 時 30 分から 15 時の間は、基調講演がおこなわれた。2 日目は、Baye Yimam 氏がエチオピアにおける言語分布と言語



写真 1 ワルシャワ大学正門

学における潮流について、4日目は、Yaqob Arsano氏がナイル川をめぐるエチオピア政府の外交政策について講演をおこなった。

本大会の全体テーマは、Diversity and Interconnections through Space and Timeと題され、実に多様なテーマ・分野に関して研究発表がおこなわれた。考古学、文学、言語学、歴史、国際関係、法律・政治・社会、生態・環境、若者・開発、エチオピア研究史、音楽・映画の10分野から公募された合計38の特別パネルに加えて、個別の発表論文を分類した18の一般パネルが設けられた。1人あたりの発表時間はパネルごとに異なり、筆者が参加したパネルでは発表20分、質疑応答10分の合計30分であった。やむを得ず大会会場まで来られなかった参加者はSkypeを用いて発表をおこなっていた。発表会場によっては、遮光が不十分でスクリーンの画面が見えにくくなってしまっていたり、声が反響して聞き取りにくかったりすることがあった。筆者自身、発表会場に貼りだされたプログラムのなかに名前が記載されていないというアクシデントがあったが、運営委員会の方々の迅速な対応により、予定通り無事に発表をおこなうことができた。多少の問題はあったものの、特に深刻な事態には至らず、大会はほぼ予定通り滞りなく全日程を終えた。

教育に関するパネルは、筆者が参加発表したNew Challenges Facing Educators and Education in Ethiopiaを含め2つ組まれていた。開発目標をいかに達成するかという観点からの研究発表が大半を占めるなかで、開発に直接結びつかない歴史教育が軽視されている現状と多民族国家ゆえに共通の歴史認識を醸成することが困難であることをソマリ地域の事例から指摘したムハンマド・ジェマル氏による発表は示唆に富むものであった。

最も多くのパネル・発表が集まったのは政治・社会分野であり、8つのパネルが組まれた。このうち、ひとつのパネルは発表者の不在により残念ながらキャンセルとなった。

辺境地域の土地問題について扱ったパネルでは、半数の発表者が西南部オモ川周辺地域における近年の国家主導の大規模開発と土地収奪の問題について批判的に取り上げていた。このテーマをとりあげた発表は政治・社会分野の他のパネルだけでなく、歴史学のパネルでもみられ、国内外の研究者から大きな関心を集めていることがうかがえた。

また、人類学に関するパネルは3つ組まれており、いずれも発表者の数が多く、まる一日をかけて組織されていた。ドイツのIvo Strecker氏がチェアを務めた文化とレトリックを扱ったパネルでは、日常的な会話や、交渉の場において駆使されるレトリックの解釈について多様な事例が提示されていた。



写真2 国立博物館でおこなわれた懇親会

大会期間中は、1日だけ強い風雨にみまわれたものの、概ね好天にめぐまれ、過ごしやすい気候であった。大会初日から最終日の翌日にかけて、連日エクスカッションが開かれた。延べ約180人がワルシャワ大のスタッフに引率され、第二次大戦後に再建され世界遺産にも登録されているワルシャワ旧市街などを訪れた。8月24日は国立博物館において、特別展示の観覧も兼ねて夕食会が開かれた。また、懇親会が2回開催され、26日はワルシャワ大学・歴史学部棟において、最終日の28日は民族学博物館においてエチオピア料理がふるまわれ、参加者

は親睦を深めていた。

筆者にとっては、国際学会にはじめて参加・発表する機会でもあり、期間中は大変な緊張と戸惑いの連続であったが、振り返ると、非常に有意義な時間を過ごすことができたと感じている。国際学会ならではの大会期間の長さも手伝って、多くの研究者と接して人脈を広げる機会を得ることができた。普段は接する機会が限られている日本国内の研究者とも、落ち着いた雰囲気の中で交流の場をもつことができ、新たな知見と更なる研究へのモチベーションを得ることができた。



写真3 閉会式

本大会は、久々のヨーロッパ開催ということで、アジス・アベバ大学からの参加希望者は非常に多かったようだが、経済的事情からか、ディレダワで開催された前回大会とくらべてエチオピアからの参加者総数は減少した。その一方で、エチオピアの地方大学からの研究者・学生の参加が目立ち、10以上の大学から参加者が集まった。エチオピア人の大会参加会費を無料とする配慮がなされた。また、アジス・アベバ大学に所属する研究者が12人、ワルシャワ大学から招聘された。その他の研究者は、地方大学の独自予算および、フランス、ドイツなどヨーロッパの大学からの直接参加であった。

なお、本大会全体のプロシーディングズ刊行は予定されておらず、それぞれのパネルオーガナイザーや参加者が発表成果を公刊することが運営委員会から推奨されている。

最後に、限られた時間と予算のなかで、今回の大会を滞りなく運営されたワルシャワ大学の方々をはじめ、大会の開催に尽力いただいた多くの方々に感謝の意を表したい。第20回の学術大会は3年後の2018年にエチオピア・メケレ大学で開催される予定である。

(筆者の本大会参加は、京都大学教育研究振興財団による国際研究集会発表助成・若手によって可能になった。記して感謝の意を表する。)

(ありい はるか)